

尾台榕堂 医案⑦

津田清蔵の姉。幼きより津山候に宦う。年三十余に至りて油風を患う。諸治効無く、頭髮尽く脱す。因りて仕うるを辞す。候聴かず。薙髪を命令し、仍お給事せしむ。後、七、八年、傷寒を患い診を請う。大熱、大渴、譫言錯語、煩躁して眠る能わず、大便通ぜず、小腹痛硬満し、小便赤渋す。桃仁承氣湯を与う。黒便・臭穢日に五、七行。諸症大いに退くも、継いで赤斑を発す。乃ち竹葉石膏湯に転ず。斑尽く消え、精神稍々復すと雖も、腹中拘攣、目眇発熱、夜間更に甚だし。是に於いて大柴胡湯に転ず。通計四十余日、平復して故のごとし。居ること数月、頭髮漸く生じ、三年の後、梳櫛、常人のごとし。蓋し大熱薰蒸し、頭中の壅瘀、沸融流動す。此の時に乗じて、多く桃仁承氣湯・大柴胡湯等を用い、以て之を推盪・洗滌す。治後、新血沛然として生ず。毛髪の再び殖える所以なり。